

大学生のノート取り方略使用と学習効力感の関係

○中條 和光¹・#魚崎 祐子²・山根 嵩史¹・田中 光¹

(¹広島大学大学院教育学研究科・²玉川大学)

山根・魚崎・田中・中條 (2016, 中国四国心理学会第72回大会において発表) では, 大学生のノートテイキングを対象にノート取り方略尺度の構成を行い, ①“見やすさ”(丁寧に書く, など), ②“視覚的標識化”(文字を囲む, など), ③“思考の外化”(自分の考えを書き込む, など), ④“情報の精選”(大切な情報を選んで書く, など), “⑤重要語句”(正しい内容を書く, など)の5因子を見出した。本研究では, 学習効力感との対応を検討することにより, 山根他 (2016) のノート取り方略尺度の妥当性を検証する。学習効力感が高い学習者は, そうでない学習者と比べると, 効果的なノートを作成していると考えられる。学習効力感の高低に応じてノート取り方略尺度の得点に変化していることを検証し, 併存的妥当性を示す。

方法

調査参加者 山根他 (2016) と同じ大学生 243 名 (男性 121 名, 女性 122 名, 平均年齢 20.37 歳, $SD = 0.10$) であった。

調査用紙 調査用紙は表紙, ノート取り方略の使用に関する質問, 学習効力感尺度, その他のフェイス項目で構成された。ノート取り方略は, 山根他 (2016) と同様の 31 項目であった。学習効力感尺度は, 森 (2004) において作成された効力感尺度を修正したものをを用いた。

手続き 調査は授業終了後の時間を利用して実施された。まず, 調査者による調査内容と調査票への回答をもって自由意志による調査協力への同意と見なされることを説明し, 調査への協力依頼を行った。参加者は, 「普段の授業でどのようにノートを取っているか, あなたのノートの取り方についてお答えください。あなたは以下のことについて, どれくらい行っていますか」という教示のもと, 全くしない (1) ~ いつもしている (5) の 5 件法でノート取り方略尺度に回答した。その後, 「以下の項目について, あなたはどのくらい当てはまりますか」という教示のもと, 全く当てはまらない (1) ~ とても当てはまる (7) の 7 件法で学習効力感尺度に回答した。

結果

学習効力感 ($M = 4.10$, $SD = 1.01$) が平均より

も 1SD 以上高い参加者を効力感高群, 1SD 以上低い参加者を効力感低群とし, 尺度の各因子について平均評定値を比較した (Table 1)。因子ごとに群間比較を行ったところ, 第一因子 ($t(54) = 2.32$, $p < .05$), 第二因子 ($t(54) = 2.29$, $p < .05$), 第三因子 ($t(54) = 2.61$, $p < .05$), 第五因子 ($t(54) = 2.77$, $p < .01$) においてそれぞれ高群の平均評定値が低群よりも高くなった。第四因子の平均評定値に差は見られなかった ($t(54) = 0.00$, $n.s.$)。

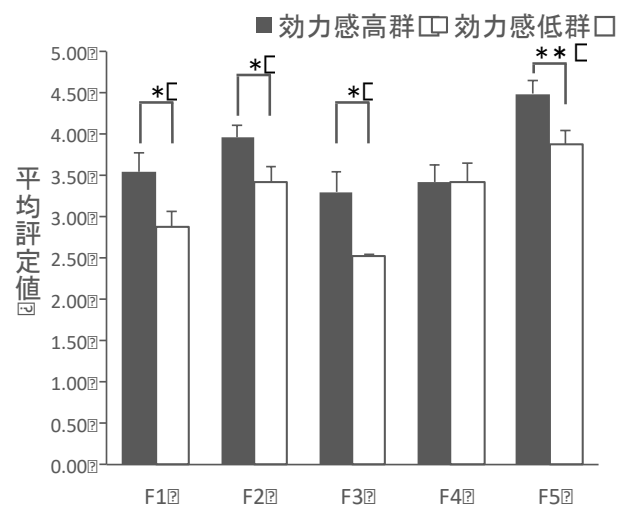


Figure 1. 学習効力感高群・低群における平均評定値 (誤差線は標準誤差)

考察

本研究では, 山根他 (2016) のノート取り方略尺度の妥当性を, 学習効力感との対応から検討した。学習効力感の高群と低群において, ノート取り方略尺度の因子ごとに平均評定値を比較したところ, 第四因子を除く全ての因子で高群の平均評定値が低群よりも高いという結果が得られ, 尺度の妥当性が概ね示された。今後の展開として, 尺度を用いた学習活動への介入や, 学習指導の効果測定のための尺度の利用などが挙げられる。

引用文献

- 山根 嵩史・魚崎 祐子・田中 光・中條 和光 (2016). 大学生のノート取り方略尺度の構成 中国四国心理学会第72回大会論文集 (頁未定)
- 森 陽子 (2004). 大学生の自己効力感と英語学習方略の関係 日本教育工学会論文誌, 28, 45-48.